

[博士論文審査要旨]

申請者：松原日出人

論文題目 温州ミカン過剰下の産地対応とその帰結
—危機下における環境変化の連鎖と産地の盛衰—

審査員 島本 実
坪山 雄樹
清水 洋

本論文は、1970年代のミカンの消費量の急減によって、危機に瀕した産地がどのように新たな発展を遂げようとしたのか、そのプロセスを歴史的に解明するものである。本論文は三ヶ日、温泉青果、宇和という日本を代表する三つのミカン産地を取り上げ、入念な事例研究によって、産地発展に成功した三ヶ日と、低迷が続く温泉青果や宇和との違いが生じた理由を明らかにしている。本論文の結論を先取りするならば、三ヶ日は温州ミカンの一つ青島を選択し、当時台頭してきた量販店のために高い品質のミカンを大ロットで出荷する体制を築き上げた。一方、温泉青果は温州ミカンではなく中晩柑の一つである伊予柑を選択したのだが、その初期の成功が他産地のライバルの参入を招き、その後は伊予柑需要の伸び悩みに苦しめられることになった。また宇和は、温州ミカンと中晩柑の両方を生産したが、結果的にはその両面作戦が仇になり、どちらでも競争に勝つことができなかった。こうした産地ごとの戦略と実施体制の違いが、産地発展の成否を分けたのであった。

本論文の長所は、複数の産地に対する綿密な調査を通じて、三つの事例ともにそれぞれ説得的な説明を与えていることにある。特に三ヶ日の事例は、同産地が生産量確保と高品質維持の巧みな両立によって、青島ブランド確立に成功した事実を丹念に明らかにしている。また温泉青果や宇和の事例でも、当事者たちは主観的には合理的であろうとしながらも、外部環境の読み違い、戦略の誤り、意図せざる産地間の相互作用等の結果から産地が衰退していく様が鮮やかに描き出されている。すでにこれらの事例研究の一部は複数の学術雑誌に査読論文として掲載されていることから、その完成度の高さがうかがえる。

しかしながら本論文にも残された課題はある。本論文の主題は、農業経営論、産業集積論、経営史、経営組織論にわたっている。本論文の発見事実がそれぞれの分野に対してどのような貢献があるのかについては、本文中でまだ十分に説明されていない。とはいえ、これらの点は本論文の長所を損なうものではなく、今後、本論文の発見事実やインプリケーションは、複数の分野にまたがって多様な貢献をもたらす可能性があるとも言える。

よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第5条第1項の規定により一橋大学博士（商学）の学位を受けるに値するものと判断する。